図 書 紹 介・New Publication

Fishes of the Great Barrier Reef and Coral Sea. John E. Randall, Gerald R. Allen and Roger C. Steene. 1991. University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii, U.S.A., xx＋507 pp., $60.00 (hard cover).

本書は南北 2,300 km，その幅 32–260 km にも及ぶ Great Barrier Reef（Coral Sea も含む）の魚類を網羅した生態写真図鑑である。筆頭著者の J. E. Randall 氏についても第二著者の G. R. Allen 氏についても，もう述べることは何もなかろう．その無数ともいえる著作や論文については，淡水であろうが深海であろうが，どんな魚に興味をもつ人でも知らぬ人はいまい．第三著者の R. C. Steene 氏の名は初めて聞いたが，著名な海中写真家とのことである．

本書はまた，J. E. Randall 氏が過去に出版してきた "Caribbean Reef Fishes", "Underwater Guide to Hawaiian Reef Fishes", そして "Red Sea Reef Fishes" と並ぶ一連の生態写真図鑑の一つともいえる．事実，生態写真の周囲に手短かな記載をつけるというスタイルは本書でも踏襲されており，非常に読みやすくて扱いやすい．もちろんすべての魚種の生態写真があるわけでなく，恐くて近づけないサメのなかま，遊泳速度が速くて追いつけないカジキやマグロのなかま，そして一部の珍しい魚については，標本写真や色彩画で代用されている．しかし，その数はごく僅かである．

本書の構成も前著とほぼ同じである．対象海域の地図，線画による各科の紹介，序論（本書の使い方も含む），魚類の体の構造の解説，科の順番（J. Nelson, 1984 の Fishes of the World, 2nd ed. の順）に従った各魚類の解説，用語集，そして索引とつづく．掲載種数は偶然か帳尻合わせか知らないが，ゾロ目の 1,111 種．よくこれだけ写真を集めたものだと感心せざるをえない．当然，対象海域外で撮影された写真も含まれているのだろうが，同定をするうえで何ら問題はない．スペースの関係か，参考文献に相当する欄はない．

あえて欠点をあげるとすれば，本海域で新記録であった場合にその詳細な記録が無いこと，写真のデータが示されていないこと，そして参考文献欄がまったくないことだが，この厚さでこの値段，そしてダイバー等の読者対象を考慮すれば，やむを得ないことといえよう．

少なくともサンゴ礁性魚類を扱う研究者やダイバーには必携の書であり，それ以外の魚類を対象とするものにとっても啓発されるし，眺めていて楽しいことこのうえない．洋書にしては価格設定も低く抑えられているので，いま買い時の一冊といえよう．

（宮　正樹　Masaki Miya）

会 員 通 信・News and Comments

第3回千葉県立中央博物館自然誌シンポジウム「生物進化と生物地理」
—主催者からの報告—

去る 12 日 8 日（日），千葉県立中央博物館において標記のシンポジウムが開催され，生物進化や生物地理に関する講演が計 8 題行われました．プログラムについては 38 巻 3 号の 337 ページに掲載されていますのでそちらをご覧ください．

今回のシンポジウムの開催にあたっては，魚類学雑誌をはじめとして，生物科学ニュースや昆虫分類学若手懇談会ニュース等に案内を掲載させていただき，さらに全国の博物館・大学・研究機関等にポスターやプログラムを送付しました．そのせいか，当日は雨の日曜日という悪条件下にもかかわらず，北は北海道から南は徳島まで総勢 150 名を超す参加者がありました．東京近県とはいえ，都心からバスも含めて 1 時間もかかる千葉中央博です．三分の一近くの人たちが関東以遠からの参加で，主催者一同たいへん感謝しております．シンポジウムも，講演者に若手の血気盛んな研究者を配すことができましたので，質疑応答を含めて結構盛況だったと思います．シンポジウムの内容については当日ご参加いただいた魚類学会会員の方にお任せするとして（何人かの人にお願いしておきました），とりあえずこの場を借りて，講演者の皆様とご参加いただいた魚類学会会員の皆様に御礼申し上げます．

今回のシンポジウムで一つの大きな収穫だったのは，熱意をもった一般の人々や大学院生に大きな知的刺激を与えられたことでしょうか．ある大学院生からはつぎのような内容のメッセージが届きました．「自分は数多くのシンポジウムやセミナーに参加しましたが，今回のシンポジウムほど興奮したことはありませんでした．」また，ある一般の方から届いた手紙には，「当日は難しくて講演の内容はほとんどわかりませんでしたが，帰って数日したら急に勉強がしたくなり，いま本を買って一生懸

命読んでいるところです」，とありました．ちなみに，新潟大の粕谷氏，静岡大の河田氏，農環研の三中氏をはじめ千葉中央博の森田・直海・宮も含めて今回の講演者の大半は三十代の前半から半ばにかけての人間です．どうもこれより下の世代はおとなしいような気がしますが，彼らに若干の火種を残すことができたようです．ナチュラルヒストリーに基づく生物進化学や生物地理学の発展に少しでも貢献できたとしたら，主催者としてこれ以上の喜びはありません．

なお，本シンポジウムの講演要旨の残部がまだ若干数あります．入手御希望の方は下記宛てにご連絡ください．宛先のタックシール等ご送付いただければ，より迅速な対応ができると思います．

〒280 千葉市青葉町 955-2
千葉県立中央博物館学芸部動物科
TEL (0472) 65-3274（直通） FAX 66-2481
望月賢二/宮　正樹

（望月賢二・宮　正樹
Kenji Mochizuki and Masaki Miya）

分類学の衰退をくいとめられるか？
—動きだした進化系統学「広域大学院」構想—

分類学の衰退は今に始まったことではない．分類学が科学の一分科として認知されずに，しかも自然誌 (natural history) が文化として根づかなかった我が国では当然のことであり，驚くに当たらない．そうすべく努力することを怠った分類学者の側の責任を問うこともできようが，今さら過去を蒸し返しても始まらない．今や分類学の存亡は崖っぷちにあるといっても過言ではないのである．

ここに平成2年度科研費総合研究 (B)『動物学の最近の学術研究動向調査』なる報告書がある．この報告書はその題名が示すとおり，担当者が最近の動物学における各分野の動向を調査し，その結果をとりまとめたものである．対象となった六つの分野のうちの一つに系統分類学も含まれており，北大理学部の馬渡駿介氏が動物学における分類学の現状を29ページにもわたって報告している．たいへんショッキングな内容なので，以下にその現状報告の概要を示す．

『講座や研究室単位で動物分類学の研究が行われているのは国立大学でわずかに14箇所，その他の公立・私立大学を含めても全国でわずかに22箇所にすぎない．その大半が昆虫で，次いで魚類，そしてその他の無脊椎動物とつづくが，魚類を除く脊椎動物の分類を研究しているところは皆無である．さらに博士課程を有する講座のうち，その名称に分類学の名を冠して堂々と教育・研究ができるのは北大理学部の動物系統分類学講座ただ一つにすぎず，他の講座では□□動物学とか○○生物学などの名を借りて分類学の教育・研究を行っているのが現状である．科研費における「分類系統」の分野での採択件数はきわめて少なく，特定研究ならびに重点領域での採択はこれまで皆無である．』

以上である．魚類の分類学研究者にとっては他人事のように聞こえるかもしれないがそんなことはない．ご存じのように，「魚類分類学」という名を冠した講座は我が国にはない．あるのは水産動物学，魚類学，水産生物学，海洋生物学などの講座名であって（それにしても見事に「分類学」の名が抜けている），これらの講座で分類学が存続しているとしたら，それは在籍する研究者の優れた見識とたゆみなき努力に加えて，周囲の理解があるからだろう．

こうした分類学における窮状を打開すべく，過去にいくつかの策が練られたようだが，結局はすべて立ち消えになってしまった．ところが，ところがである．思わぬところから救いの手が差し伸べられようとしている．分類学とは本来無縁なはずの千葉大理学部の丸山工作氏（世界的な生化学者であり日本学術会議の現委員）が，全国に散らばる分類学研究者を「広域大学院」なる組織に集めて，絶滅の危機に瀕している分類学の研究・教育体制を新たに構築する構想をぶち上げたのである．前掲の報告書で氏はわざわざ章を改めて，「広域大学院（博士課程）系統進化研究科設立を！」と題する小文を執筆し，分類学の重要性とその危機的状況を訴えると同時に，それを救う唯一の手段が，新たなマンパワーも建物も必要としない「広域大学院」であると論じているのである．

さて，そもそも「広域大学院」構想とはいかなるものか，少々長くなるが丸山氏の小文を導入部分も含めて引用してみる．

『わが国の自然科学の中で，欧米と比較してもっとも見劣りし，近年ますます先細りしているのは，生物の分類系統に関する分野である．‥‥

‥‥地球上の多種多様な生物についての総合的な系統進化学なくしては，これからますます発展するであろう生物科学の根幹は成立しない．いま不要に見えていても，その必要性と必然性をともなう日が来るのは間違いない．現存の分類系統学関係の研究室が消滅してからでは遅いのはいうまでもない．‥‥

他方，「ヒューマン・ゲノム」プロジェクトにみられるように急速に応用研究が展開されている遺伝子の生物学は，生物の系統進化にとってたいへん有力な手段とな

る．（中略）‥‥若い世代が分類学，形態学，遺伝学，細胞学，生化学，生態学など古典的手法と組み合わせて，これからの系統進化学を築きあげていくことは大いに可能である．そこでは魅力的な「多様性生物学」の建設すら期待される．

さらに，生物の分類系統に博物学的探求心を持続する社会人がアカデミックな訓練を時間をかけて受けたいとひそかに願っている．これら社会人にひろく門戸を開放する博士課程は生涯教育の見地からも希ましいものであろう．‥‥

ここで，全国規模の広域大学院の設立を提案したい．日本各地に所在する国立大学の研究室を最小単位（不完全講座でも）として，主だった動物群の分類系統学をカバーする約40単位に遺伝子進化学講座5，それに国立博物館5単位を加えておよそ50単位を統一大学院に組織化する（公立大学はまずは協力単位にしておく）．（中略）予算は各単位に移算する．

この独立大学院は博士課程3年にのみ限り，社会人にも開放し，学歴については学士，修士号については独自の認定機構によって正規の教育課程をへていなくても入学の道を開く．院生は主指導教員と相談の上複数の研究室（副指導教員）を渡り歩くことができるようにする．（中略）全員併任の教育組織は，全国規模のため，年1回開く全体会議を議決機関とするほか，院生の研究発表を通じて交流に役立てる．（中略）3年以上在学し学位論文を提出して審査を通過したものには学術博士の学位が授与される．‥‥

このような新しいタイプの広域大学院は，以前には考えることさえできなかった．独立した総合研究大学院大学が設置されたり，先端科学大学院が実現して，わが国の高等教育の多様化が促進されている現状にあっては不可能とは思われなくなっている．

このような新広域大学院構想は，“絶滅”のピンチにある日本の系統進化学を“保護”し，遺伝子生物学の新しい“血”を入れて，まさに新しい学問“多様性生物学”の樹立をねらったものである．と同時に，社会人のアカデミズムへの参加をエンカレッジし，高齢者社会における生涯教育にいささか貢献するものである．‥‥』

実はこの「広域大学院」構想は動きだしている．すでに昨春の時点で丸山氏を中心とした非公式の構想委員会がつくられ，次代を担う若手研究者を中心に若干名のメンバーが選ばれた．昨年12月までに4回の会合がもたれ，氏の構想の具体的な説明があり，この構想を担うことのできる教官（大学院の博士課程に何ら関与していない国立大学の教授もしくは助教授）がリストアップされ，さらにこれらの人材をもとに設置可能な講座が検討された．また同時に，文部省向けの『進化系統学広域大学院（博士課程）の設置計画概要』と題する文書が前掲の丸山氏の素案をもとに作成されているところであり，広域大学院の設置の趣旨，その組織と編成，教育課程，履修方法及び授与する学位等，この計画の具体案の策定作業が行われている．また，平成4年度科研費総合研究(B)に本構想の調査費を申請しており，これが通ればいよいよ広域大学院構想が本格的に動きだすことになる．

もちろん，この構想が実現したからといって分類学の未来が明るいかというと決してそんなことはない．建物もない博士課程だけの大学院に人が集まるのか？　人材供給が可能になってもそれを受け入れる就職先はあるのか？　標本保管場所の問題はどうなっているのか？‥‥など問題点が山のようにある．しかし私は，分類学外の人間からこのような動きがでてきた今そのときを除いて，我が国における分類学復興のチャンスは永久に巡ってこないと考える．自然誌（＝博物学）に対する世間一般の理解が高まり，分類学外の人間が助けてあげようと手を差し伸べてくれ，文部省も聞く耳をもとうとしているときに何とかしなければ，もはや絶滅を待つしかないのが分類学の現状ではないだろうか．（いったん絶滅させた方がよいというのも一つの見識だとは思うが．）たまたま私は魚類の分類学関係者として委員会のメンバーに加わることになったが，分類学の衰退をくいとめる最後の手段として，この「広域大学院」構想の実現に協力していきたいと考えている．

最後に一言．本稿は「この構想に隠すところは何もありません．どんどんオープンにしてください．」という丸山先生のお言葉に甘えて書かせていただいたものです．オープンであるからには魚類分類学関係者の意見もどんどん吸収していきたいと考えております．この構想に関心のある方には可能なかぎり資料を提供しますので，私までお申し出ください．

（宮　正樹　Masaki Miya）

Call for Expressions of Interest for Participation in a SYMPOSIUM ON ECOLOGY, BEHAVIOUR AND EVOLUTION OF LARVAL FISHES to Be Held as Part of the 4th International Indo-Pacific Fish Conference in Bangkok, 28 Nov–4 Dec 1993

Please contact Jeffrey M. Leis, Fish Section, Division of Vertebrate Zoology, The Australian Museum, PO Box A 285, Sydney South, 2000 as soon as possible. Indicate name, address, tentative title and preference for oral or poster presentation. Although arrangements for the Con-

ference are not yet finalized, there are plans for publishing a Proceedings Volume. It seems unlikely financial assistance will be available from the Conference organizers, so start saving your frequent-flyer credits now. While papers on all aspects of larval biology will be welcome, papers on larval behaviour and the use of larvae in assessing relationships are particularly encouraged. For more information of the Conference, contact the Chair, Prof Supap Monkolprasit, Faculty of Fisheries, Kasetsart University, Chatuchak, Bangkok 10903, Thailand.

(Jeffrey M. Leis)

会　　記・Proceedings

1991 年度第 3 回役員会

1991 年 9 月 9 日（月），於東京水産大学資源育成学科会議室

出席者：落合，上野，谷内，新井，富永，松浦，多紀，宮，佐野，丸山，藤田

1. 前回議事録の確認.
2. 報告事項．編集：38 巻 2 号の発行を準備中．手持ち原稿 66 篇．庶務：長良川河口堰建設に反対する会の機関誌に同会からの依頼により建設省に出した要望書の主旨に沿ったコメントを載せた．フランクフルト・ブックフェアーに魚類学雑誌の宣伝を出す．来年度の年会会場（東京水産大学）の借用手続きを済ませた.
3. 日本魚類学会からの日本学術会議水産学研究連絡委員会委員候補者として谷内透氏（東京大学農学部）を推薦することに決定した.
4. 編集にかかわる人件費の増額の要望が編集委員長から出されたが，今年度は若干の予算超過は認めるができるだけ予算額に納めるように努力し，来年度の予算案作成時に増額を検討することに決定した.
5. 1992 年度の秋季シンポジウムは水産大学校で引き受ける了解が得られ，竹下貢二教授（水産大学校増殖学科）を責任者として実施されることが決まった．テーマは未定.
6. 1988 年度から改訂されていない海外購読料の改訂案が谷内会計幹事から出され，1992 年度から値上げ幅が約 10%の 95 ドル（現行 86 ドル）とすることに決定した.
7. 年会講演発表の講演要旨には図表，写真を載せないことに決定した.
8. 魚類学雑誌第 1 巻 1 号から 37 巻 4 号までの総目録（author index, new taxon index 等）は約 1600 項目，120–130 ページと見積られることが富永担当委員から報告され，魚類学雑誌の supplement として刊行することに決定した.
9. 第 4 回インド・太平洋国際魚類会議（1993 年 11 月 28 日–12 月 4 日に Bangkok で開催）の first announcement が来ているので魚類学雑誌に載せることにした.
10. 学協会著作権協議会から同会への登録参加の依頼がきているが，魚類学会としては登録の方向で検討することになり，その場合著作権を著作者から魚類学会に移すことが必要となるので，評議員会に諮るべく準備を進めることになった.
11. その他

1991 年度第 4 回役員会

1991 年 10 月 24 日（木）．於東京水産大学資源育成学科会義室

出席者：落合，上野，本間，新井，多紀，宮，佐野，丸山，藤田.

1. 前回議事録の確認.
2. 報告事項．会長：秋季シンポジウムは 10 月 6 日に北里大学水産学部で開かれ，約 80 名が参加して活発な質疑応答がなされ盛会であった．編集：38 巻 2 号は発行．38 巻 3 号は 11 月 15 日に発行の予定で 16 篇を掲載．手持ち原稿 56 篇．1992 年度年会の会告を 38 巻 3 号に掲載する．学術会議動物研連報告：第 1 回会議が 10 月 11 日に開かれ，新しい委員のメンバーが決まった．平成 5 年度から科学研究費申請の細目が変わる予定.
3. 魚類学雑誌第 1 巻 1 号から 37 巻 4 号までの総目録（author index 及び new taxon index）の作成はすでに決定されているが，subject index や systematic index を作成する場合，担当者を決める必要があるので，今後どうするか検討していくことにした.
4. 学協会著作権協会への登録のため，会則および細則の変更を検討することに決定した．また，学会事務局の地方巡回も今後検討していくこととした.
5. 日本の学術情報等を紹介する日本学術振興会からの魚類学雑誌（平成 4 年 4 月から 7 年 3 月までの刊行分，各 2 部）の寄贈依頼を承認した.
6. 1992–1995 年度までの評議員選挙を実施するにあたり，各地区の評議員数（国内個人会員 20 名に対し 1 名の割合）を決定した．各地区の評議員数は北海道